

研修報告書「写真コレクションによる展覧会づくり」

(「20世紀の写真芸術 学生がつくる大阪新美術館建設準備室・enocoのコレクション」展)

北原 史香

はじめに

私が今回このインターンに参加しようと思った理由は、人と何かを「つくり上げる」という経験をしたいと常々思っていたからである。周りにいる良く知る誰かとではなく、初めて出会う何も知らない誰かと共に一つの目的に向かっていくこととはどういうことなのか、興味関心を持ちながらインターンに参加した。また、観る側として行っていた展覧会がどうつくられているのか気になっていたことも理由の一つであった。約半年間の研修を通じて自分なりに得た考察と経験を述べてみたいと思う。

1、展覧会づくりについて

オリエンテーションはどことなく緊張しながら参加した。このインターンにおいて関わってくださる方々のお話や、共に研修生として活動していく初めて会った皆さんのお話を聞いていくうちにこれからへの期待が高まってきたのと同時に、インターン生の中には大学で実際に写真やカメラ、芸術の勉強をしている方も多く、何も知識のない私の中で何かできるだろうかと焦りも存在したのを覚えている。オリエンテーションのその日から活動が始まり、私は全体で五章ある中の第三章の20世紀初めにヨーロッパで芸術運動が盛んだった時代の写真を担当することになった。インターンに申し込みをしたときにもうこの章を担当したいと思っていた。その理由は私が大学で学んでいる社会学という学問分野が発展した時期と重なっていたということと、歴史的に社会が大きく変わったことが誰の目から見ても明らかな時代であったということである。そんな思いもあったからか、章のタイトルや構成、パネルの原稿を考える際にどうしても社会的かつ歴史的な背景を自分の中で優先してしまい、作品そのものや撮影した人物に焦点を当てるが出来なくなっていた。学芸員の菅谷さんや一緒に三章を担当した二川さんに写真展は社会的なものだけではないということを教えて頂き、偏ることなく撮影者の出身や学んだ場所、影響を受けた人物などの要因を踏まえつつ作品を見るようになった。ここで私は誰かと共につくりあげることの良さを一つ実感したように思う。一人だけで考えたものや選択したものはどこかその人の主観がメインになってしまい、その人物の思想や考え方が観る側にも伝わってしまう。もちろん、その展覧会が作品のつくり手一人のものであればそれが正しいのではないかと思うのだが、「選ぶ側」である今回の展覧会においては必ずしも正しいことではないと感じた。展示コンセプトや原稿を作成する際、インターネットの情報や大学の図書館を利用して作者の情報や、その当時盛んであった芸術運動であるアバンギャルドについて調べたが、どれだけ探しても名前が出てこない写真家もあり、その写真を展示すべきかどうか悩んだ点の一つである。また、アバンギャルドなど、言葉の意味にも様々な解釈があり、どれを取り上げて展示の際の言葉として使用するか、それらの情報を自分のもの

として理解し、来てくださる方に伝わる内容にできるかどうか私の中では大きな課題であった。顔の見えない相手に自分の伝えたい内容や魅力を伝えることは難しく、しかも理解しにくい言葉もあることや字数にも制限があることを考慮しながら文章を考えることがいかに難しいかを身をもって経験することが出来た。

写真家の吉田忠司氏の「大阪の写真表現史」のレクチャーをお聞きした際には写真に対する自分の知識のなさを実感すると同時に、「写真」という芸術の中でも身近な文化であるにも関わらず、知らずにいた奥深さに触れることが出来た。その奥深さと同時に、その文化を作ってきたのは「プロ」と呼ばれる人々だけではないのだということも自分なりに解釈することが出来、これからの写真との関わりが楽しみになるレクチャーをして頂いた。

記憶に残っていることの一つにイベント／ワークショップの企画がある。まず、題材を何にするか悩みに悩んだ。トークや講義形式のものを企画するにしろ、ワークショップを企画するにしろ、私には写真に詳しい知り合いや先生方もおらず、今回の展覧会に関連させることすら簡単なことではなかった。子供向けのイベントも考えたが、やはり自分が参加してみたい、聞いてみたいと思えるものを企画することにし、自らが担当する近代とも関連付け、時代背景を探る哲学的なイベント案を作成した。結果的にピンホールカメラを作るワークショップに決定したが、企画する中で自分の興味対象を知ることができ、実際に今後こういった企画を実践したいと思えたのは新しい発見であった。

展覧会へ向けての準備の中で最も心残りだったことは、平日で大学の講義があったために展示作業に参加できなかったことだ。このインターンの中でもメインとなるものであると同時に私自身楽しみにしていたため残念であった。同じインターン生の方々から、展示作業は遅い時間までかかり大変だったという話を聞いた。撤去作業は参加できたのだが、ここで私が驚いたのは作品を扱う際の慎重さだ。そもそも私たちはあまり作品に触れることはできず、作業がスムーズに進むように業者へ指示を出すのがメインであった。そこにはどこか緊張感が伴い、大切な作品を扱っていたのだなと美術館の展示の裏側を見ることが出来た高揚感も味わった。作品の貴重な「財産」としての価値を実感できたことも良い経験であったと思う。そしてこれは振り返りでも述べたいのだが、予想以上に早く終わった撤収作業に、どこかあっけなさを感じると同時に、「芸術」という作業に関わるとはこういった一瞬のための働きなのかもしれないと感じた。その困難さも魅力も含めてそれを生業としている人々の豊さに憧れを抱いた。

展覧会づくりを通して得た自らの課題については、振り返りの中で触れていきたいと思う。

2、ピンホールカメラワークショップについて

カメラに関する知識が全くなかったため、ピンホールカメラを作成するという自体未知だったのだが、子供たちとできるワークショップということで楽しみにしていた。インターン生の中でもカメラを専門でやっていらっしゃる小西さんに知識をレクチャーしていただき、私はワークショップ最終日の担当だったため前半二回のワークショップの反省点や改善点を教えていただいて、その日担当ではなかったにも関わらず来てくださった小西さん、谷奥さんのアドバイスも受けながら、当日ワークショップがスタートした。

子供向けのイベントの運営は何度か経験があったのだが、細かい作業を共にやるというのは経験がなくうまく写真が出来なかった時の心配ばかりしていたが、来てくれた子供たちが楽しそうに自



分から進んでカメラづくりに取り組む姿を見ながら一緒に楽しんでいたらそんなことは気にしなくなっていた。子供たちの人数も考慮して、人数を半分ずつに分けて行動するようにしたり、飽きてしまう子がでないように工夫しながら進められるように、カメラにする箱をデコレーションできるように用意したり、進行する上での問題点を確認しながら役割分担をすることで、子供たちが怪我

をすることも、大きな問題もなく終わることが出来たように思う。

何を被写体にするか、それを決める時間、どんなカメラに装飾するか、写真が現像された時の反応、その全てに個性が表れていて人は一人ひとり全く違うということを今更ながらに再認識する不思議な経験となった。一番嬉しく思ったのは、「またやりたい」と言ってくれた子がたくさんいたことだ。そしてこれは完全に私見になってしまうのだが、まわりと同じように行動することや集団から外れないように生きることが重要とされるような時代だからこそ、個性を大切に自分のしたいことを一番大切にしてほしいと思うと同時に自分もそうありたいと感じた。「教える」立場としてのワークショップだったはずが、振り返ってみると「教えてもらった」ワークショップであったと思う。

3、研修全体を通じた振り返り

この報告書を書きながら、約半年間のインターンを自分なりに振り返ることが出来たように思う。全体を通して今回のインターンでは「自分が達成できたもの」よりも「新たに学んだこと」、「改善しなければならないこと」の方が圧倒的に多かった。写真や展示に関する様々な知識、人と共につくり上げることの面白さと難しさ、「個性」の大切さ。そして中でも社会人になるには必要とされるであろう、報告、連絡、相談が出来ていないこと

を感じた。これは私のこれから社会に出る前の最重要課題として心がけていきたい部分である。そしてもう一つ、自分のキャパシティーを知ることも大切であると感じた。何にでも興味があり、関わってしまいがちなのだが、自分の現時点でのキャパシティーを理解し、目の前のことを一つずつこなしていくことが人に迷惑をかけない最善の方法であり、それが出来たら次のことを始めてみるべきなのだと反省点も多かった。

さて、ここで私が研修を通じて得た「芸術の面白さ」について述べたいと思う。それは繋がり広さだ。社会学や哲学をはじめ、どんな分野のものと繋がりやすく、どんな分野を専攻する人にも関わりやすい。そこが芸術の魅力であり人々を惹きつける理由だと感じた。そして私にとってそれは希望でもある。将来自分がなにをしたいのか、漠然とはありつつも明確にはなっていない私は、写真を含む芸術のテリトリーの広さにどこか安心感を得ると同時に、それをいま自分が学んでいるものやこれから学んでいきたい何かと繋げていけるような人物を目指したいと強く思った。そうした面からみても非常に有意義なインターンであった。

また、「はじめに」や展覧会づくりの章でも述べたように、観る側ではなくつくる側としての展覧会であった今回、それを意識して振り返った時に鮮明に覚えているのは、作品の撤去作業の際に感じたあっけなさだ。私は以前より芸術が一過性のものになりがちであることに疑問を持っており、そこに永続性があるのも良いのではないかと思ってきた。しかしそれは観る側としての一面を捉えた批評であり、つくる側はその一時の一瞬の美に力を注いでいるのだと知ることが出来た。



インターン全体を通じて、上記で述べたような自分に足りないものやこれからの目標、課題を再確認することができた。もし、このインターンに参加していなかったらと思うと怖くなるほど、人と何かを作り上げる際に重要なこと、社会に出る際に重要なことを認識できたことは大きかった。また、ここで得た出会いを大切に将来に活かしていきたい。

今回のインターンでは多くの方々に様々なことを教えていただき、大変お世話になった。その感謝の気持ちを忘れずに自分にできるなにかを見つけていきたい。